

台南神学校『校友会雑誌』(1928年-)にみる「台湾人」意識

三野和恵 (日本学術振興会特別研究員/京都大学・大学院生)

はじめに

筆者は、これまで日本植民地支配下台湾のイングリッド長老教会宣教師キャンベル・N・ムーディ (1865-1940) の著作分析を行ってきた。その過程で、離台後宣教師職を辞した1930年代の彼が、台湾の状況を問題とし続けると同時に、キリスト教徒はいかにして現実の「苦しみ」に対峙すべきかを考える中で、台湾の反植民地主義ナショナリズムへの共感を表現した児童文学を執筆したことを明らかにした¹⁾。ムーディが観察した「苦しみ」を共有する住民の共同意識は、王昭文が提示する「台湾人」意識と重なり合う。王は、「台湾人」とは血統で定義される既存のエスニシティではなく、台湾において互いに異なる背景を有し、摩擦を繰り返しつつも、外来の支配者と対峙し、共に抵抗や妥協を行うことを迫られる中で、ある共同の感覚—「台湾人」意識を持つに至った人々として定義する²⁾。王は日本による植民地化以前には清朝の周縁の位置にあった台湾において、「台湾人」に相当する言葉が台湾の住民という以上の意味を持たず、抗日運動が活発化した1920年代以降にアイデンティティに関わるものとして用いられ始めた事実をふまえながら、その中でキリスト教の果たした役割を考察している³⁾。

「台湾人」意識とキリスト教の重要な接点となったのが、教会学校だった。台南長老教中学に関わる駒込武の研究が指摘するように、日本統治下台湾では「日本人のヘゲモニーを固辞し続けようとする」総督府の体制への対立物として「〈台湾人〉意識」が生み出され、1920年代にはこれを結節点として、キリスト教徒・非キリスト教徒台湾人が同校を「台湾民衆の教育機関」としてゆこうとする動きが見られた⁴⁾。また、当時の台湾人キリスト教徒の中に既存の教会を批判して社会改革への参与の必要性を唱える者がいたことは、宣教師たちの報告書から窺われる。これらの台湾人キリスト教徒にとって、〈台湾人であること〉のアイデンティティは、〈台湾社会の現状に対してキリスト教徒としてどのように対峙するのか〉をめぐる議論を通して表現されるものであった。ただし、これらの動向は、あくまでも宣教師が間接的に伝えたものである。台南長老教中学をめぐる駒込の一連の研究にしても、台湾人の言動に関しては長老教中学の中核的教員だった林茂生 (1887-1947) の主張に着目するに止まり、同校や台南神学校の学生・同窓生自身の言論に関してはほとんど取り上げていない。

これに対し、本稿では台湾人自身の声を窺える資料として、台南神学校 (現台南神学院) 『校友会雑誌』に着目する。現役の神学生を含め、ほぼ台湾人だけから構成される校友会会員により執筆・編集された本資料は、植民地支配下の台湾人自身が語り、発信し、当時「国語」とされた和文 (日文) 以外の言語を用いる余地が確保された媒体であり、台湾人キリスト教徒、神学生・聖職者 (伝道師及び牧師) のおかれた状況と問題関心を見出す上で重要な資料と考えられる。

台南神学校の校友会組織に着目した先行研究は台湾キリスト教史の文脈では存在していない。一方で、『校友会雑誌』という媒体そのものに関しては斉藤利彦の研究が挙げられる。斉藤は戦前期日本及び植民地・占領地、海外の日本人学校で広く発行されたこれらの資料に着目し、その多

くが「教員と生徒の手で編集され」、従って『学ぶ者』の側の意識や状況を反映するものとしての意義を有すると指摘する⁵⁾。また、市川雅美は戦前期日本の校友会の有り様を検討し、これらの組織が生徒自治の萌芽を部分的に有したことを指摘する⁶⁾。これに即すれば、台南神学校校友会組織もまた台湾人が主体的に運営する自治的空間の一面を有しつつも、植民地的支配関係の下で自治的性格はいっそう限定されていたと予想される。しかし、そうであればこそ、このような試みの意義はより明確化され、評価される必要がある。また、台湾史の文脈では台湾総督府国語学校の『校友会雑誌』を検討した陳文松の指摘が示唆的である。陳は、植民地ナショナリズムの担い手である「青年」は、母語と宗主国の言語の「二重言語読み書き能力」を備えていたというベネディクト・アンダーソンの指摘を踏まえ、『校友会雑誌』の記事の執筆が、投稿者らの「青年」的实践としての意味を持ち、1920年代台湾の抗日ナショナリズム運動の担い手—「台湾青年」の前身である「校友」のアイデンティティを形成する場であったと論じている⁷⁾。ただし、1910年代において最も高度な教育機関の一つであった国語学校とは異なり、聖職者養成を目的とする台南神学校では、こうした二重言語読み書き能力を有する者はごく一部に限定され、むしろ漢文のみ、あるいは和文のみでなければ自己表現の困難な人々もまた存在していたであろうことに注意が必要である。

以下、本稿では、まず台南神学校『校友会雑誌』発行の背景に関わる情報の整理を行い、本資料の特徴、及びそこから読み取れる1930年前後の台湾人キリスト教徒を取り巻く状況を捉えることを目指す。次に、台湾人キリスト教徒らによるキリスト教と社会の問題に関する議論の中で、「台湾人」という存在がどのように意識されていたのかという問題を本誌に即して考察したい。

1. 台南神学校『校友会雑誌』の背景情報

1-1. 台南神学校『校友会雑誌』の書誌情報

1927年、創立五十周年を迎えた台南神学校は校友会を組織し、翌年『校友会雑誌』を創刊した。同校は、1877年に宣教師が台湾府（現台南）にて台湾人聖職者養成を目的に創設した⁸⁾。『校友会雑誌』の毎号巻末（第2号を除く）に掲載される「校友会々則」（以下「会則」）によれば、校友会は「本校〔メンバー〕の愛情のつながり、智識の交換を助ける」ことを目的とし、このため「毎年少なくとも一回漢文の校友会雑誌を発行すること」を定めている〔原文漢文〕⁹⁾。本誌の目的は、第1号（1928年）にある潘道栄（1889-1952）の「発刊詞」にも窺われる¹⁰⁾。

まずは、我々の精神を表現するものとして。さらに我々の理想を発揮することができるように。次に、神学上の問題を論じるために。最終的に、校友の親しい愛情をつなぎ止めるために。これがすなわち〔この〕雑誌の発刊の目的である。〔原文漢文〕

筆者はこれまでに、本誌の第1号（1928年1月）、第2号（1929年12月）、第3号（1931年7月）、第4号（1933年7月）の現存を確認した。第4号の「編集後記」における発行困難の状況を示唆する言葉や¹¹⁾、姉妹校である台南長老教中学が34年に神社参拝問題をめぐって激しい排撃運動を受けた事実を鑑みると、第5号以降は発行されなかった可能性が高い。同事件は、長老教中学の校友会雑誌の日本語の比重を圧倒的に高めたほか、同中学の生徒が礼拝に訪れる台南東門教会の牧師を務めていた黄侯命（1890-1950）と潘道栄の関係を複雑化させた。両者は共に台南神学校校友会役員を兼ねていたが、神社参拝問題のために黄が同中学の校牧の職に続き、東門教

会の牧師職をも失ったことで、台湾人信徒の間に大きな亀裂が生じたからである¹²⁾。

奥付によれば、本誌は「台南市港町」の「五端第三支店印刷部」で印刷された。神学校側の代表者は第1号が林燕臣（1859-1944）、第2号以降が潘道榮とある。発行部数は未詳だが、四冊共に「非売品」と記されている。一般の雑誌とは異なり、「検閲済」の判がなく、校友会組織の会員を中心とする相対的に私的なサークルでの共有が想定されたと考えられる。なお、筆者が台南神学院図書館で収集した三冊（第1、3、4号）は綴じられており、第1号に「金然蔵書」の判がある。「金然」とは校友会会員の一人で、本誌創刊時には神学生であった陳金然（1900-67）を示すと思われる。一方、台南市立図書館所蔵の三冊（第2-4号）には「昭和九年十二月拾七日」付の印刷者高田平次による台南図書館への寄贈サインがある。このことから少なくとも、本誌が1934年末時点から校友会関係者の想定した範囲以外にも閲覧可能なものとなったことがわかる。

「会則」によれば、本誌は創刊当初は漢文雑誌たろうとしていたが、第2号以降では「漢文壇」とそれに続く「国文壇」（和文欄）、及び漢文と和文が入り交じる「雑録」欄が設けられ、第4号以降では逆に「国文壇」に「漢文壇」が続いている。第3号以降に掲載される「会則」では、本誌の目的が「毎年少なくとも一回和漢文の校友会雑誌を発行すること」と変更されたことも確認できる〔原文漢文〕¹³⁾。この変更は、本誌の性格や想定読者を考察する上で示唆的である。

台南神学校の学科課程は清末期以来、聖書、白話字、宣教実習、漢文（経書、聖書）を中心とし、他に算術、音楽、地理などが教えられた¹⁴⁾。白話字とは閩南系台湾語をローマ字によって表記するシステムであり、信徒教育や宣教活動で中心的に用いられていた。宣教師と台湾人は閩南系台湾語で話し、クラスでは白話字と漢文が教えられた。一方、1895年の日本による台湾領有後は、日本人教員による日本語教授が徐々に導入された¹⁵⁾。清末期、日本統治期を通して歴代校長を宣教師が務めるなど宣教師が一貫して中心的な位置を占め続けた一方で、文化的にはイギリス人、台湾人、日本人から構成される多民族環境にあり、同時に言語では閩南系台湾語と日本語が、言語表記では漢字、ローマ字、仮名が用いられる多言・多文環境にあった¹⁶⁾。

このような状況下、当時南部台湾の長老教会の文書伝道は、宣教師が多くの信徒には難解であると考えた漢文ではなく、習得し易いとした白話字を中心に用いた。実際、宣教の初期段階では一部の読書人階層出身者を別として、多くの信徒は漢文を使わず¹⁷⁾、同教会の主要な伝道文書である『台湾府城教会報』（1885年創刊）は、白話字によってキリスト教に関する意見や情報の交換・信徒教育を行う場として機能した¹⁸⁾。

このことから、台南神学校『校友会雑誌』の出版言語としての漢文の選択は、白話字使用圏としての台湾の長老教会組織外にある、漢文を使用する人々を意識してのものであったと仮説的に考えられる。当時、『教会報』を中心とする白話字文書伝道への重点的取り組みは、教会の結束を促した反面、漢文を使用する人々への働きかけを相対的に困難にした側面がある。一方で、一部の台湾人信徒が漢文宣教文書を非キリスト教徒台湾人と共有する例もまた見られたからである。例えば牧師王占魁（1887-1969）によれば、牧師林学恭（1857-1943）の改宗の契機はキリスト教徒となった友人の家で見た漢文賛美歌集であったと述べる¹⁹⁾。ムーディもまた、長老陳其祥（1865-1921）が既に信徒となっていたお手伝いの少年を通じて漢文訳の聖書と出会い、キリスト教に改宗した経緯を描いている²⁰⁾。後述するように本誌の内容には〈キリスト教徒であること〉を論じる中で〈台湾人であること〉の意味を表明するものが含まれている。このように問題関心が教会組織内部に限定されていなかった点も漢文という表現手段を用いたことと整合的である。

1-2. 台南神学校の校友会組織

「会則」によれば、台南神学校の校友会組織は同校出身者である「正会員」、同校教師である「名誉会員」から組織され、会費は毎年1円とされた。第2号以降に掲載される正会員とその職業のリストに着目すると、本校の卒業生が必ずしも聖職者になったわけではない実態が窺われる。例えば第2号発行時点での卒業生には、伝道師・牧師・長老教会の教育機関の教師など、広義の宣教事業に携わる者が75名、このほかに農商、医師、会社員、裁縫業、旅館業、牧畜業、理髪業、米穀商など長老教会の組織外で活動する者が32名おり、長老教会の組織外を主な活動舞台としつつも、校友会組織と連なっていた卒業生が30名前後存在していたことがわかる²¹⁾。

会を運営する役員は会員選挙で任命され、任期は二年（再選可）であった。1928年当初の役員は、会長の高金聲（1873-1961）、副会長の廖得（1889-1975）、書記の潘道榮、会計の黄侯命である。これらの役員は33年時点でも変わらず、少なくとも二回再選されたと考えられる。彼らの多くは親の世代以来のキリスト教徒であり、例えば高金聲は最初期の伝道師高長（1837-1912）の子、潘道榮は最初の牧師潘明珠（1864-99）の子、黄侯命もまた初期の伝道師黄能傑（1853-1927）の子であり、ムーディに聖職者への道を勧められて入学した廖得を含め、いずれも台南神学校を出て南部台湾の長老教会やその教育機関で働いてきた人物であった。

このほか編集部員、地方委員（高雄区、嘉義区、台南区、台中区）の二種の役員は、それぞれ『校友会雑誌』の編集・発行、記事投稿を担った。編集部員は神学校教員や牧師が「部長」を、伝道師や神学生が「部員」を務めた。例えば、それぞれ1928年と29年以降の部長を務めた林燕臣と楊世註（1881-1971）は、当時それぞれ神学校教授、彰化教会の牧師であった。部員の王進丁（生没年不詳）は28年には台東東門教会の伝道師であり、許水露（1904-69）と許有才（1903-84）は現役の神学生であった²²⁾。一方、地方委員は各地で活動する牧師・伝道師が務めた。

台南神学校校友会の主な活動は集会と『校友会雑誌』の発行であった。集会には定期役員会と校友大会があった。前者の記録は未見だが、後者については第二回校友大会記録（1929年7月9日）が第3号に掲載されている。これによれば、第二回校友大会は名誉会員二名（モンゴメリ、林燕臣）、正会員40名が参加し、会計の黄侯命による収支報告（1927-8年）、役員選挙、『校友会雑誌』第2号以降での漢文と和文の併用を含む、いくつかの議案と議決がなされた²³⁾。他方、上述のように『校友会雑誌』の原稿は地方委員が担当していたが、他の会員に対する原稿募集も『教会報』において行われた。例えば、1929年10月の『教会報』には、「今年は第2号の校友会雑誌を印刷します。そこで校友の皆さんに、原稿の募集をします。漢文、和文を問わず、どちらでも良いです。期間は10月末までとします」という募集が掲載されている〔原文白話字〕²⁴⁾。

以上のように、台南神学校の教師の中に宣教師が含まれていたのはもちろん、日本人も含まれることがあったが、校友会組織において台湾人を主体とする自治的な運営がなされていたことは注目すべき事実である。

2. 台南神学校『校友会雑誌』の内容分析

2-1. 台南神学校『校友会雑誌』の全般的傾向

本誌の内容は、形式により「漢詩」、「論説」、「雑録・転載」、「その他」の四種に分類できる。これに従うと、学校行事に関わる記録や遺書など転載された文書からなる「雑録・転載」を除けば、本誌に直接寄稿された文書の大半は「漢詩」と「論説」に分類できる。漢詩には聖書の内容や宣教の熱意を表現するもの、牧師就任者への祝いや信徒同士の挨拶が含まれており、校友の相

互コミュニケーションの媒体であったことが窺われる。他方、「論説」には台湾宣教の沿革をふりかえる「沿革」、宣教や神学校、本誌の目的と使命を語る「目的」、キリスト教神学や聖書解釈を論じる「神学・聖書」、倫理や自然科学に関わって人の在り方を考察する「哲学」、礼拝説教の大意をまとめた「礼拝説教」の五つのサブグループを設けることができる。「雑録・転載」もまた「祝辞」、「追悼・遺書」、運動会のプログラムなどを含む「行事記録」、「名簿」、「会則」、「会計・統計」の六つのサブグループに分けた。神学校関係の活動紹介や唯一の和漢文記事である編集後記は「その他」に分類した。その上で、漢文と和文それぞれごとに本数を示したのが表1である。

表1 台南神学校『校友会雑誌』（1928-33）記事タイプと本数

	第1号		第2号		第3号		第4号		計		総計	
	漢文	和文	漢文	和文	漢文	和文	漢文	和文	漢文	和文		
漢詩	7	0	28	0	22	0	33	0	90	0	90	
論説	沿革	1	0	0	0	3	0	0	1	4	1	66
	目的	4	0	6	3	2	3	2	0	14	6	
	哲学	0	0	1	3	1	4	2	1	4	8	
	神学・聖書	1	0	4	2	2	5	3	7	10	14	
	礼拝説教	0	0	0	0	0	0	0	5	0	5	
小計	6	0	11	8	8	12	7	14	32	34		
雑録・転載	祝辞	9	0	2	0	2	0	2	1	15	1	45
	追悼・遺書	1	0	1	0	1	0	2	0	5	0	
	行事記録	0	0	0	1	2	0	1	0	3	1	
	名簿	1	0	5	0	3	0	4	0	13	0	
	会則	1	0	0	0	1	0	1	0	3	0	
	会計・統計	1	0	0	0	2	0	1	0	4	0	
小計	13	0	8	1	11	0	11	1	43	2		
その他	0	0	0	1	2	0	1	3	3	4	7	
計	26	0	47	10	43	12	52	18	168	40		
総計	26		57		55		70		208			

出典：《台南神学校校友会雑誌》第一～四号（南部台湾基督長老教会台南神学校、1928-33年）。

表1から各号の特徴を見ると、第1号には「雑録・転載」の「祝辞」タイプの記事が集中している。これは創刊号である本号が、1927年6月29日開催の台南神学校創立五十周年記念会におけるスピーチを多く転載していることによる。このため、本誌に投稿した唯一の宣教師である校長モンゴメリのスピーチもまたここに含まれる。また、第2号には宣教の意気込みを語る「目的」タイプの記事が多く、第3号には南部台湾の長老教会や関連機関の創立記念日のリストなど「沿革」に関わる漢文論説が多い。言語上のバランスでは、第2号以降の各号の和文記事は漢文記事よりも約10-20頁多いが、記事本数は漢文記事が圧倒的に多い。これは全本数の40%を占める「漢詩」と25%近くを占める「雑録・転載」がほぼ全て漢文であることによる。ただし、論説全体、及び論説の「聖書・神学」、「哲学」、「礼拝説教」タイプでは、逆に和文記事の本数が多く、それも号を追って「神学・聖書」タイプを中心に増えている。そのため、第2号以降の「漢文壇」：「国文壇」：「雑録」の頁数もまた、第2号では32:39:10、第3号では24:52:26、第4号では、22:54:12となっている。ただし、他方で漢詩の掲載数も号を追うに従って増えており、和文中心の「論説」と、「漢詩」及び漢文中心の「雑録・転載」とが分化してゆく傾向が見られる。

以下では、「論説」タイプの記事に焦点を当てて、執筆者の教育経験をふまえながらその特徴を分析することとしたい。本誌の「論説」記事は、ペンネームの者と、3名の中国人や東南アジアの華人など台湾の長老教会組織外の者を含む30名の著者によって寄稿されているが、そのうち本名と生年が判明している台湾人著者は15名存在する。この15名の生年、日本留学の経験の有無に着目し、漢文・和文それぞれの「論説」の本数を示すと、表2のようになる。

表2 台南神学校『校友会雑誌』（1928-33）論説著者の日本留学経験と投稿言語

生年	日本への留学経験				計	
	無		有		漢文	和文
	漢文	和文	漢文	和文		
1880年以前	林燕臣 4、高金聲 1、高篤行 1	-	-	-	6	-
1881-90年	楊世註 1、郭朝成 5、 王占魁 1、廖得 1	-	潘道榮 3	潘道榮 4	11	4
1891-1900年	陳思聰 2	陳金然 3	-	陳瓊琚 1、劉振芳 2、 王守勇 2	2	8
1901-10年	-	周天來 2	-	許水露 4	1	6
計	16	5	3	13	19	18

出典：《台南神学校校友会雑誌》第一～四号（南部台湾基督長老教会台南神学校、1928-33年）。

表2によれば、台南神学校『校友会雑誌』投稿者には二十代から七十代までの者が含まれる。投稿言語に着目すると、大きく分けて1890年以前に生まれた者は漢文を、それ以降の生まれの者は和文を中心に用いている。また、和文での投稿者は日本への留学経験者を中心としている。これらの特徴は、多言・多文環境にあった当時の台南神学校の状況を反映しており、校友会のメンバー間にも、自己表現の言語としてより使い易いものが相違する状況が現れていたことを窺わせる。例えば1898年に宣教師の閩南系台湾語教師を務めた林燕臣は、清朝時代の科挙秀才でもあり、漢文への造詣が深く、25年以降は神学校の漢文教授を務めた²⁵⁾。逆に、この人物が和文を自在に読み書きできた可能性は低いと考えられる。5本の漢文論説を著した郭朝成（1883-1962）は9歳の齢から草屯の書房で三字経や四書を学んでいた。彼は1902年、19歳で台中公学校の三年生に編入学したが、翌年には他の多くの同級生と共に退学し、教会附設の小学に入学した。その後、郭は1905年に台南長老教中学に、1907年には台南神学校に入学し、11年には同校を卒業して伝道師としての活動を開始した²⁶⁾。郭は9歳以来の漢文学習を重ねており、和文を本格的に学んだのは20歳を過ぎて長老教中学に入学して以降のことである。このことを鑑みれば、少なくとも和文の読解ができたと推測される一方で、書く言語としてより自在に用いることができたのは漢文であった可能性が高い。

一方、1895年の台湾植民地化は、台湾の人々にとって日本語を身につける必要性和機会の増加を意味した。このことは、1890年前後とそれ以降の生まれの台南神学校校友の日本留学の増加にも反映された。陳金然（1919-20）は台南師範学校（1919-20）を卒業して教師として務めた後、台南神学校を経て（1926-31）、32年に牧師となった。周天來（1905-75）は台南長老教中学（1919-）、台南神学校（1923-5）を卒業後、屏東で商業を営んだが、『教会報』に多数の白話字記事を投稿するなど、長老教会組織に活発に関わり続けた。陳金然と周天來に関しては、管見の限り日本留学経験の記録は存在しないが、これらの若い世代は生まれたときから日本語を「国語」とする環境で育っており、読み書きの言語としては漢文よりも和文に親しんでいた可能性が高い。

他方、やや年上の潘道榮は、1899年に台南長老教中学に入学、1906年に台南神学校に入学し、1909年にはイングランド長老教会の公費で明治学院に留学した²⁷⁾。清朝時代の生まれであるが、日本への留学経験を通じて日本語能力を身につけたものと思われる。漢文・和文の双方で論説を著した者には潘道榮のほか、生年不詳のため表2には含まれない半樵子、潘德彰、潘願如／願如生がおり、半樵子、願如生はペンネームであると考えられる。

また、表2において、1891年以降生まれ且つ日本留学経験者は和文のみで投稿していることがわかる。例えば2本の和文論説を著した劉振芳（1897-1969）は1912年に台南長老教中学に入学

し、台南神学校を経て（1917-21）日本に赴き、27年に明治学院神学部を卒業後、翌28年に牧師となった²⁸⁾。このような人物もまた、自己表現の言語としては漢文よりも和文に親しんでいた可能性が考えられる。

このように、表2に含まれる台湾人論説著者の投稿言語の選択の背後には、世代や教育経験の多様な相違の影響が見られる。そこには、同じ教会の関係者でありながらも、植民地支配の影響により懸隔を有するようになった人々の姿を見出すことができる。しかしながら、これらのメンバーの間には、共通の問題関心もまた存在した。

2-2. 「四百万同胞」への使命

それでは、台湾人キリスト教徒は宣教にどのようなヴィジョンを見、それは台湾社会とはどのような関係にあったのか。この問いを以て本誌を見ると、宣教の目的を語る漢文論説を中心に「我台」、「台民」、「台島」、「四百万同胞」などの表現が多く見られる点が着目される。

はじめに取り上げた先行研究で指摘されているように、これら「台湾人」に相当する言葉がアイデンティティに関わるものとされるようになったのは、主に1920年代以降のことである。これらの言葉には、(A)〈台湾人〉を示す「(我)台民」、「我全台島民」、「(台)島人」、(B)「四百万同胞」や「同胞」、(C)〈我が〉という所属の意識と、所属場所としての「台湾」が組み合わさる「我台」、「吾台」、「吾島」などが含まれる。これらは、第1号の13箇所、第2号の8箇所、第3号の11箇所、第4号の3箇所で見られている。また、(D)〈我が〉という明確な所属意識を示す語が付随しない「台疆」、「台陽」、「台地」、「全島社会」、「此小島」などは、各号を通して頻繁に用いられている。重要なことに、これらの言葉は世代や教育経験の相違を越えて、林燕臣(A、B、C、D)、郭朝成(A、B、C、D)、潘道榮(A、D)、半樵子(B)、陳金然(B)、劉振芳(C)など多数が用いている。

具体的には例えば、女性宣教活動のパイオニアであった潘氏筱玉(1878-1944)は、神学校創立五十周年記念スピーチの転載記事において、「[台南神学校]は全台湾に傑出する模範者である。五十年来、台湾の民を救うことを自らに任じてきた」と述べ、その卒業生らは「この島台湾の多くの民が、滅んでしまわないよう、「四百万の同胞が、暗闇を去り、光に向かうように」働く「台湾の指導者に違いない」と述べる〔原文漢文〕²⁹⁾。また廖得は漢文論説「台湾之死活問題」にて、キリスト教宣教を〈戦い〉に見立てて以下のように述べる³⁰⁾。

思い返せば我々の神学校の校友は二百余人。その内の三分の二が天の国の戦線に立っている。逃亡兵や敗将たち。その数は数えきれない。今や我々は七十余人となった。百余りの教会を導くことができるのか。二万余りの天の兵士たちを指揮することができるのか。外患と内乱、バラバラになってしまった精神の世界から救うことができるのか。この小さな島の四百万同胞たち。逃げて身を守る場所があるのか。ただ我々が「牧師」か「牧私」または「牧敗」の職責をとるかどうにかかっている。我等校友よ共に勉めよう。皆で「牧師」になろうと。そうすれば台湾の天の国は幸福に微笑むことになるだろう。〔原文漢文〕

このようにキリスト教徒が自らの宣教活動を「死活問題」に関わる〈戦い〉に見立てることはさほど特異ではない。ここではむしろ、「二万余り」の「天の兵士」という表現が着目される。これは、廖得がこの記事を投稿してから5年後の1934年には、南部台湾の長老教会信徒数が33,444名であったことを鑑みれば、キリスト教徒を示すものであろう³¹⁾。さらに、「我台」や「四百万

同胞」という一つの共同体イメージが繰り返し提示されているのは、呼びかけの対象が教会の内部だけに止まっていたのではないことを示す。「四百万同胞」という語は当時、台湾人経営による初の日刊紙『台湾新民報』や「台湾地方自治聯盟宣言」（1931）など、抗日ナショナリズム運動の舞台でも用いられたものであり、台湾人全体への呼びかけとしての意味をも持っていたからである³²⁾。

このように、潘氏筱玉や廖得は、台南神学校校友は「四百万同胞」——長老教会組織内外の台湾人——に対する宣教と〈救済〉の使命を負うものと考えていた。この認識は同時に、両者において社会に対する〈キリスト教徒〉の使命を語ることで、〈台湾人であること〉に伴う「四百万同胞」に対する使命感の表明と重なり合っていたことを意味すると言える。

これらのことから、少なくとも「我台」、「四百万同胞」などの当時の長老教会のコミュニティ内外を連ねるチャンネルを意識的にふまえた台南神学校『校友会雑誌』の著者らは、本誌を通して台湾人固有の使命感を有するキリスト教徒としての自己認識、いわば〈台湾人キリスト教徒〉としてのアイデンティティを提示し、確認していたことが窺われる。逆に言えば、これらの著者にとって、台湾人であり且つキリスト教徒であることは、「四百万同胞」と「共に救いの道を登る」という〈台湾人キリスト教徒〉固有の使命と理想に向かう行動＝宣教によって、確認されるものであった³³⁾。これらの言葉が世代や植民地支配によって生じた教育経験の相違を互いに抱えていた校友会メンバーの間で共通して用いられたことは重要な事実である。

2-3. 理想的キリスト教信仰の主張と植民地社会への現状批判

このように「台湾人」意識とも連なり得たキリスト教と社会の関係に関する問題は、しばしば本誌論説記事の中心的トピックとなっている。それらの論説には、例えば郭朝成のように、キリスト教の理念に通じる「謙遜」な姿勢が「国」を「発展」させるとするものもある。郭はその例として「我が日本国」は「謙遜」にして努力を重ねて強国となったと述べるが、「日本国」と一体化した意識を持っているわけではない。その直後に孔子の言葉や新約聖書、アメリカ史からの例を並列させ、日本帝国の台頭の例を意識的に相対化し、最終的には話を「我が台湾の伝道師たち」への宣教の心構えの呼びかけに移行させているからである〔原文漢文〕。この論説を始めとし、郭朝成の語りには、目前の現実に発しながら抽象的・普遍的次元に議論を引き上げ、現に存在する文化・民族の序列関係を相対化した上で〈台湾人キリスト教徒〉の使命を論じるという、二重三重にもひねりを加えた主張方法の工夫が見られる³⁴⁾。

また、本誌にはキリスト教的人間観や理想を論じることを通じて、植民地支配下にある社会の序列関係を相対化するような論説も含まれる。和文論説を中心に展開されるこれらの語りは、植民地台湾の状況とは異なる社会のイメージを提示することで現状批判を行い、社会的コミットメントに消極的な教会の姿勢に対しても批判的である。例えば、台南長老教中学・台南神学校を経て1930年頃に東京に留学して神学を修めた許水露は、「靈魂不滅」と題する和文論説にて、全ての人の靈魂は神によって造られたものであるとするキリスト教的人間観に基づき、全ての靈魂には「貴賤の差別もなければ又君臣、父子、夫婦、兄弟の差別もない」と主張する³⁵⁾。また、半樵子というペンネームの人物は、和文論説「清教主義の歴史と其中心思想」にて、イングランドのピューリタニズムの歴史をふりかえる中でエリザベス1世を神学を重視しなかった君主として批判し、「今日吾国に於ても宗教を奨励し利用せんとし乍ら宗教上の問題に対して極めて冷淡なる政治家が決して少なくない様である」と述べている。続けて半樵子は、ピューリタンたちの性質に関して次のように論じている³⁶⁾。

斯く清教徒は内的生活を尊重し、正義の念が強烈であったが、夫れと同時に亦社会のあらゆる階級的思想及び制度を悪み、自由を尊んだ。〔中略〕而して彼等は地上に神の王国を建設する為には、神の命令を遵奉しなければならぬ。夫れが為めには神の命令に反する横道非道を極力打破しなければならぬと考えて、之が為めに解放と自由を主張し信仰上神の真理に服するの外、決して人の威圧に屈服しなかった。〔中略〕彼等諸教徒〔清教徒〕は嘗に宗教上の自由を求めたのみならず、亦政治上の自由をも要求した。

ここで半樵子は、「政治上の自由」と結びつく「宗教上の問題」を重視するピューリタンと、逆にそれを「冷淡」に扱う君主や「政治家」の姿を描き出し、後者を批判的に捉えている。さらに半樵子は、キリスト教的ヴィジョンに立脚して社会に対峙することには「階級的思想及び制度」との対抗という政治的コミットメントが伴われることを自覚的に論じている。このような論調には、婉曲的ながらも反植民地主義的ともとれる姿勢が見られる。同時に、政治的なラディカリズムとの結合を示唆する本論説が、ペンネームによって投稿されたのは、たとえ私的なサークルで配布することを基本的な性格にしていたとしても、当局による監視の視線を意識せざるを得なかったことを物語るものだろう。

本誌には教会の社会的コミットメントへの覚悟を促す文章もまた見られる。例えば、屏東で商業を営んでいた周天來は、和文論説「イエスの倫理的教訓」にて、キリスト教の「品性」を以て「利己主義、征服主義の世にイエスの理想を實踐せんとする者は、当然大なる犠牲と迫害とを覚悟しなければならぬ」と論じた³⁷⁾。半樵子もまた和文論説「人生の奮闘と後援」にて、「此の世に於いて為すべき事業を耶蘇から授かって居る」キリスト教徒は、「此の苦難多き世」に「最後まで踏み留ま」り、「世の中を善くする」ために「苦しみを忍び、戦いにも堪えねばならぬ」と述べる³⁸⁾。両者はキリスト教へのコミットメントが「苦しみ」に留まる選択をも意味し得ることを、切迫感を以て表明する点で共通している。

このように、台南神学校『校友会雑誌』には、キリスト教的理念と連なり、同時に政治的意味合いをも帯びる、反「差別」や「解放と自由」などのイメージを提示することにより、植民地支配下にある台湾社会の序列関係を相対化し、批判する論説が存在した。これらの論説は同時に、日本植民地支配下の「台湾人」が、植民地台湾社会の差別的な在り方に対抗して「世の中を善く」しようとする中で受ける「迫害」の「苦しみ」への覚悟を呼びかけるものであり、ここにキリスト教の社会的意味の模索と「台湾人」意識の形成・表明の接点があったことを示すものである。

おわりに

以上、本稿は台南神学校『校友会雑誌』の資料批判と内容分析を行い、本誌の投稿者である台湾人キリスト教徒らが、台湾社会におけるキリスト教宣教の使命と意義を語る中で、「四百万同胞」への宣教を固有の使命とする〈台湾人キリスト教徒〉のアイデンティティの提示と確認を行っていたことを明らかにした。これにより、1930年前後の一部の台湾人キリスト教徒において〈台湾人であること〉と〈キリスト教徒であること〉の意識が「迫害」や「苦しみ」への覚悟を接点として相互補完的に関わり合い、宣教の呼びかけと実践こそが「台湾人」意識や「台湾人」共同体の想像に連結し得た状況を捉えた。

改めて確認すべきことは、本誌が基本的には「校友」という関係者のサークルを中心にいわば

私的に共有されるものでありながらも、「国語」としての日本語使用を義務付ける植民地状況下の権力関係とは無縁であり得なかったことである。当初は漢文雑誌として創刊された本誌が後に和文欄を設け、その割合が号を追うに従って増加したことから、校友会組織の外部からの監視の視線を意識していた可能性も否めない。しかし、そうであればこそ、台湾人が誌面構成の中心的な主体となった媒体において、反植民地主義的とも解釈できる論説が掲載されていたことの意味は小さくない。しかも、同じ台湾人キリスト教徒であっても、生まれた世代や日本への留学経験を含む教育経験により、読み書きに使用する言語ひとつをとっても植民地支配の影響による大きなズレを互いに抱えた状況にあった中で、「四百万同胞」への使命を語る言論が登場しつつあったことが重要であろう。

本稿で残された課題も多い。『校友会雑誌』中の漢詩の分析は、その一つである。また、本誌について第5号以降が発刊されなかったという推測が正しかったとして、それでは1930年代半ば以降の台湾人キリスト教徒の動向はどのようなものだったのか、またそこで本稿で明らかにしたような議論がどのように受け継がれたのだろうか、という問題が存在する。この点についてさらなる追求をする手がかりとなるのは、日本への留学生が残した言論である。その分析は今後の課題となるが、仮説的な見通しを述べるとすれば、例えば、台南長老教中学を卒業後、東京帝国大学に留学した黄彰輝(1914-88)の言行が着目される。黄彰輝は、東京大学YMCA学生寮の日記(1934年4月25日)にて、「強者は弱者の肉を探すに余念なく信義愛情共に地に落ち」た世の現状や、これに異を唱えない教会の在り方を鋭く批判している。「クリスチャンの血は常に構成的破壊の精神に漲っているべきだと思う」(下線は原文)と述べる黄は、東大YMCA学生寮での早祷の時間を自らにとっての「来るべき時への備え」、「爆発への点火」、「激情の冷静」としてゆきたいと語っている³⁹⁾。

現状に異を唱えない教会への批判に貫かれるこの言葉は、台南神学校『校友会雑誌』における半樵子らの語りと類似している。1930年前後には、学生キリスト教運動の取り組みなど、キリスト教信仰が様々な次元における社会問題にどのように直面すべきかが広く模索されていた。黄彰輝を含む台湾人の日本留学生は、これらの動きを留学経験や日本語媒体を通して入手し、自らの問題関心へと読みかえてゆく営みを行うまた一つのコミュニティであったと言える。今後は台湾人の日本留学生による〈台湾人キリスト教徒〉のアイデンティティの模索の有り様を追求してゆきたい。

註

- 1) 三野和恵「日本統治下台湾におけるキリスト教と反植民地主義ナショナリズム—宣教文書『山小屋』(1938)に見る『苦しみ』と『愛国』の問題に着目して—」『日本台湾学会報』第14号(日本台湾学会、2012年)。
- 2) 王昭文〈從歴史認識台灣〉、鄭仰恩主編《台灣基督長老教會歷史教育手冊》(台灣基督長老教會教會歷史委員會、2010年)、pp. 21-39。台湾キリスト教史研究には、1865年の宣教師來台以来の台湾の教会組織(台湾基督長老教会)の歴史を論じる台湾基督長老教會總會歴史委員會編《台灣基督長老教會百年史》(台灣基督長老教會、1965年)、宣教師発行の教会刊行物《台灣府城教會報》の調査を通し、清末期南部台湾の長老教会の教育伝道を検討した張妙娟《開啟心眼—《台灣府城教會報》與長老教會的基督教徒教育》(人光出版社、2005年)などが存在する。なお、本稿の註では中国語の史資料名の表記にはヤマカッコを、日本語の史資料名

の表記にはカギカッコを用いる。また、引用文中の註や史資料中の言語など、史資料に関わる補足は亀甲カッコを用いる。以下同様。

- 3) 王昭文〈日治時期台灣基督徒知識分子與社會運動（1920－1930年代）〉（成功大學歷史學系碩博士學位論文、2009年）。
- 4) 駒込武「台南長老教中学神社参拝問題―踏み絵的な権力の様式―」『思想』No. 915（岩波書店、2000年9月）、pp. 35-42。
- 5) 斉藤利彦『『校友会雑誌』研究に向けて―その意義と課題―』斉藤利彦『旧制中等諸学校の『校友会誌』にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化』（2009-2012年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書（第一集）、2011年）、pp. 1-10。
- 6) 市川雅美「旧制中学校の校友会における生徒自治の側面―校友会規則の分析を中心に―」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第43巻（東京大学大学院教育学研究科、2003年）。
- 7) 陳文松「『校友』から『台湾青年』へ―台湾総督府国語学校『校友会雑誌』に見る『青年』像」『年報地域文化研究』第9号（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2005年）、pp. 138-42。
- 8) 高金聲〈臺南神學校之沿革〉、《創立五十周年記念 校友會雜誌 第一號》（私立臺南長老教神學校、1928年）、pp. 4-7。
- 9) 〈校友會々則〉、前掲《校友會雜誌 第一號》、p. 23。
- 10) 潘道榮〈發刊詞〉、前掲《校友會雜誌 第一號》、p. 2。
- 11) D. E. H. 〈編輯室〉、《臺南神學校 校友會雜誌 第四號》（南部臺灣基督長老教會臺南神學校、1933年）、pp. 87-8。
- 12) 賴永祥〈史話 488 潘道榮當東門副牧〉、《賴永祥長老史料庫》、最終更新日 2012年11月7日、閲覧日 2012年11月26日〈<http://www.laijohn.com/index.htm>〉。
- 13) 〈校友會々則〉、《台南神學校 校友會雜誌 第參號》（臺灣基督教會臺南神學校、1931年）、p. 84。〈校友會々則〉、前掲《校友會雜誌 第四號》、p. 81。
- 14) 甘為霖著、阮宗興校注《臺南教士會議事錄》（教會公報出版社、2004年）、115. 1。
- 15) 'Toa-òh [大学]、'Tâi-Lâm-Hû-Siâ "Kàu-Hoe-Pò [台南府城教会報]。第137巻、1896年8月、p. 60。Pa Khek-lé [パークレー]、'Jip Sîn Hák-hau [神学校に入る]、'Tâi-Oân Kàu-Hoe-Pò [台湾教会報]。第460巻、1923年7月、pp. 9-10。
- 16) 台南神学校『校友会雑誌』創刊当時（1928年）の同校スタッフは、校長モンゴメリ（W. E. Montgomery, 1881-1968）、舎監の高金聲（1873-1961）、教授のダンカン・マクラウド（Duncan MacLeod, 1872-1957）、林燕臣（1859-1944）、山本岩吉（生没年不詳）の五人であった。
- 17) Band, Edward. *Working His Purpose Out: The History of the English Presbyterian Mission 1847-1947*. Taipei: Ch' eng Wen, 1972, pp. 112-3.
- 18) 前掲張妙娟、pp. 96-7。以下、本文では『教会報』の略称で表記する。
- 19) Ông Chiâm-khoe [王占魁]、'Góa só Chun-kèng Siâu-liām ê Su-iú [私が尊敬し追悼する師友]、'Tâi-oân Kàu-hoe Kong-pò [台湾教会公報]。第939巻、940巻、1964年8月、pp. 17-9。
- 20) Moody, Campbell N. 'Tan Keeshong.' *The King's Guests: A Strange Formosan Fellowship*. London: H. R. Allenson, 1932, pp. 28-48.
- 21) 〈現在生存校友遵照會則第六八條編入正會員之氏名列左〉、《臺灣基督教會臺南神學校 校友會雜誌 第貳號》（臺灣基督教會臺南神學校、1929年）、pp. 74-6。〈現在生存校友遵照會則第六八條編入正會員之氏名列左〉、前掲《校友會雜誌 第參號》、pp. 80-3。〈現在正會員名簿〉、

- 前揭《校友會雜誌 第四號》、pp. 77-80。
- 2 2) 〈本年校友會役員〉、前揭《校友會雜誌 第一號》、pp. 24-5。〈本年校友會役員如下〉、前揭《校友會雜誌 第貳號》、p. 77。〈本校友會役員如下〉、前揭《校友會雜誌 第參號》、p. 83。〈本年校友會役員如下〉、前揭《校友會雜誌 第四號》、p. 80。〈傳教師查詢〉、《台灣基督長老教會》、最終更新日 2012 年、閱覽日 2012 年 11 月 26 日〈<http://www.pct.org.tw/>〉。
- 2 3) 〈第二回校友大會紀錄〉、前揭《校友會雜誌 第參號》、pp. 86-7。
- 2 4) 'Kin-kò: Sîn Hák-hāu Hāu-iú Cháp-chì [原稿の募集：神学校校友雜誌]' *Tâi-Oân Kàu-Hoe-Pò* [台灣教會報]. 第 535 卷、1929 年 10 月、p. 6。
- 2 5) 〈林燕臣牧師〉、楊士養編著 林信堅修訂《信仰偉人列傳》(人光出版社、1994 年)、pp. 89-94。
- 2 6) 郭朝成《傳道行程》(未出版、2006 年)、pp. 15-6、pp. 52-3、p. 1200。
- 2 7) 賴永祥〈史話 407 潘明珠牧師的家屬〉、前揭《賴永祥長老史料庫》。
- 2 8) 賴永祥〈劉振芳牧師小檔案〉、前揭《賴永祥長老史料庫》。
- 2 9) 潘氏筱玉〈祝神學五十週年〉、前揭《校友會雜誌 第一號》、pp. 13-4。
- 3 0) 廖得〈臺灣之死活問題〉、前揭《校友會雜誌 第貳號》、p. 18。
- 3 1) 前揭《台灣基督長老教會百年史》、pp. 490-1。
- 3 2) 「希望に満つる日刊台湾新民報の使命」、「言論解放と經濟權益の伸張」『台湾新民報』第 398 号 (1932 年 1 月 16 日)。〈台灣地方自治聯盟宣言〉、《台灣地方自治聯盟要覽》(台灣地方自治聯盟、1931 年)、《數位典藏數位學習國際型科技計劃》、閱覽日 2012 年 11 月 26 日〈<http://digitalarchives.tw/>〉。
- 3 3) 林燕臣〈發刊詞〉、前揭《校友會雜誌 第一號》、p. 1。
- 3 4) 郭朝成〈滿招損謙受益論〉、前揭《校友會雜誌 第一號》、pp. 18-9。郭朝成〈破除迷信論〉、前揭《校友會雜誌 第貳號》、pp. 14-5。
- 3 5) 許水露「靈魂不滅」、前揭《校友會雜誌 第貳號》、pp. 46-9。
- 3 6) 半樵子「清教主義の歴史と其中心思想」、前揭《校友會雜誌 第四號》、pp. 6-13。
- 3 7) 周天來「イエスの倫理的教訓」、前揭《校友會雜誌 第參號》、pp. 49-51。
- 3 8) 半樵子「人生の奮闘と後援」、前揭《校友會雜誌 第參號》、pp. 76-8。
- 3 9) 黃彰輝「四月二十五日 (水)」、『二階村早禱日誌』(未出版手記、1934 年)、東京大学 YMCA 学生寮に保管。

**Discovering Taiwanese Consciousness in
*The Bulletin of Tainan Theological College Alumni (1928-)***

MINO Kazue (Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science/
Kyoto University, Graduate School)

This paper explores how Taiwanese Christians around 1930 perceived and expressed their own identity of being Taiwanese and Christian, particularly when facing contemporary social circumstances. In order to do so, this paper analyzes *The Bulletin of Tainan Theological College Alumni* (BTTCA), an annual magazine published by Alumni members of Tainan Theological College (established in 1877), and discusses the following three points.

First it is the significance that BTTCA was published both in Japanese and Chinese, despite the constraint of colonial policies that established Japanese as the national language. Alumni members managed to employ Chinese in many BTTCA articles, and operated the periodical autonomously to a significant degree.

Second, through an examination of BTTCA articles, I will discuss that Alumni members, due to their varied educational experiences, faced a significant generation gap in terms of command of language. Alumni members were distinctly divided into the younger generation, who received a Japanese education and/or studied in Japan proper, and the older generation of Christians, who grew up during the late-Qing era, thereby mastering Chinese rather than Japanese.

Third, this paper argues that despite the intergenerational gap regarding command of language, many Alumni members collectively sought to articulate the significance of their identity as both Taiwanese and Christian, in the face of contemporary social circumstances. This was especially true of the Alumni members who formed and affirmed their Taiwanese consciousness in BTTCA, through the expression of their peculiar mission of evangelizing ‘Four Million Fellow Countrymen’, that is, all of Taiwanese society.